
ハナノナノ（未定） 3

希羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハナノナノ（未定） 3

【Nコード】

N0405V

【作者名】

希羽

【あらすじ】

またまた縦読み推奨

一日とちよつとで書きました。このペースを維持したい。

感想などよろしければお願いします!!!

突っ走る静先輩に連れられ、無言で階段を駆けあがって着いたところは、屋上の扉の前。

保健室と同じ棟の、四階と屋上との間には、教室半分ほどのひろさの薄暗い場所があった。

屋上のドアは閉め切りとなっており、辺りには工具や壊れた掃除箱、机などが「とりあえず」といった具合に置かれている。

そして同様にとりあえず僕をそこに残し、「ちょっと待ってて」と言い放って静先輩は階段を降りて行った。

僕は再び待たせれ、待たせるタイプの静先輩が、どのくらい待たせてくれるか期待に胸を膨らませて待機することになっていた。

「ただいま！」

右手を高く上げて悪ふざけっぽく演出しながら、彼女が現れたのは意外にもその3分後。

「早かったですね」

「心がけましたもの！」

そう答えるのは、背中をプッシュされたときと同じ、厚かましさと馴れ馴れしさをセット料金で押し売りする女子生徒の笑顔だった。両手を後ろに回して、幅の狭い肩を振った。

自分でやっておいて、「ふへへ」と身勝手に照れ始める。

「目の下赤いですよ」

静先輩はきょとん、として、ふふんと穏やかに微笑む。

「そんなこといっても引っかかりませんよー。うりゃ！」

先輩は僕の頭をポカッと叩こうとして、軌道が逸れ、小さな拳は左目に投下される。

「ぎゃーす！」

「あは、ごめんぬー…」

電灯が無いために、下の階から反射した外の光が、階段を經由して足元まで届く。

床は、ワックスを削る生徒の脚がないせいか、歪んだ鏡の様に僕らの輪郭を映し出した。

油をこぼしたような七色の滲みが、総括して色褪せた黄土色を放つ。

ふう

どちらかが一息を吐く。

風の届かないこの場所は、どうも空気の動きがなくて、小さな声がに耳につく。

どちらから切り出すか。

僕は謙虚に後輩の立ち位置を配慮して、会話のキャッチャーミットを用意する。

「さーてと、知りたいこと、あるよね？」

「はい」

自分が思っている以上に、自分の声が遠く響く。

「その前にちよっといい？」

僕の了承を待たずして、躊躇ためらいなく歩み寄ってきた。

この明度では、僕の裸眼は静先輩の顔を伺えない。見えるのは垂れさがる色素の薄い髪と、力の抜けた肩。

「先輩？」

聞く耳を持たずに、すらりと細い脚を止めない。

光を跳ね返す氷の様な床が、短いスカートから伸びる健康的な脚部を、下に行くほど明確に写す。

もう少しだけ床の再現力が高ければ、その足の根元、短い傘の下まで僕に見学させてくれるんだけど。

そういった邪な理由よこしまを一部含め、大部分焦燥にかられながら俯いていると、僕のつま先辺りで、少し小さなつま先が止まった。

目のすぐ下には、生え際まで抜かりなく金に染め上げられた、先輩の頭部がある。

妙な距離で止まられて、直立不動しているはずなのに、三半規管が要らぬ世話を焼き、前か後ろかに一步踏み込みそうだ。

それが10秒続いて、先輩のつむじをまじまじと見る一人遊びに専念していると、つむじが僕の胸に接着を果たした。

細い両腕は僕の鎖骨あたりに飛来する。

静先輩の指先は冷たかった。

「大丈夫ですか？」

「んー」

肯定とも否定ともとれる唸りが、つむじを通じて僕の胸へと微かな振動を流し込む。

肩を支えればいいのか、それは先輩的には許せるのか。日本中の男子生徒から飛ばされる架空の野次を振りきり、電信柱のごとく立ち尽くすことにした。

風林火山の山に従事しているといえ、聞こえはいいはず。

「先輩、元気ですか？」

そんな切りだししかできない、自分も不甲斐ない。

「んーん」

「そうですか」

たぶん否定だろう。これで元気満タンなら、先ほどの鬱陶うつとうしさは僕の白昼夢になる。

そして、またしばらく時間をあけて、先輩の体重を半分くらい負担したまま、落とした鍵でも探すように、何も変化がない辺りを見

回していた。

「純くん」

「はい」

「久しぶり」

「：はい」

ほんとうに。

「純くんはさ、変わってないね」

あなたに言われると、申し訳ないくらい、変わってないです。

「ちょっと安心した」

「そうですか」

「うん」

「先輩は」

言っていることか決めかねて一度言葉を区切り、

「変わりましたね」

そういつて、控え目に右手をその小さな頭に添えた。

「どんなふうに？」

「どっきゅんって感じに」

軽い頭突きを連発される。

笑われてしまった。

声に出さず、胸の奥で取り乱さず笑う昔ながらの彼女。

それが胸と手のひらに伝わってくるのだ。

その小刻みな動きが、やがて止まる。

「話すね」

本人なりの心の準備を終えられたのか、それとも単純におしゃべりを楽しみたかったのか。

いずれにしても、表情を裏返す様に、強い口調がとんだ。

「はい」

ぶっ

先輩が勢いよく頭を上げた。

顎に、滑らかな生糸のはえた鉄球をお見舞いされて、痛快な天体

観測を楽しまされる。

低い天井。

衝撃から弾き出た、数個の星に眼福^{がんぷく}を得る。

痛みを堪能しながら、地上の星も眺めるべく視線を下げると、深刻な態度で僕を見つめるふたつ星に出会う。

少々不慮の打撃が発生したくらいでは、なんの反応もないくらいに、意志は固まっているようだ。

もしくは恥じらいを隠す行為の一種か。

階段を背にする、少し小柄な女子生徒。

その足元から、色つきの影がこちら側へ伸びていた。

思い出を交えてもうちょっと暗闇で親しみたかった、かも。

「簡潔に言う、結のこと。結果、経緯、原因。純くんには知る義務がある。知って、欲しいの」

義務…。

眉間にしわを寄せる癖が発動してしまう。

僕は彼女にとって、なんでもない。

もはやただの他人であり、それ以上でもそれ以下でもあった過去を持ち、やはり他人であるべきだと思ってる。

もう元に戻らない関係を、関与しないことで、関係ないという関係のもとで、別の世界を僕は生きる。

望まなければ、失わないのだから。

「結は、死んだ」

軽薄、軽率、何を言っているか理解の外だな。言葉を選べ。

「死んでない。結は生きてる！七恵結は！」

どういうわけか怒声が、自分の背後から遅れて聞こえた。天井の低さが、予期せぬ音の流れを生んだのだろう。

早すぎる反論は増幅されて、聴覚を圧倒する音量に達した。

身勝手に前に乗り出した膝が震える。

それでも、静先輩はたじろがない。

「あなたを知っている七恵結は、死んだ。私を知っている彼女も…。

生きているのは、記憶と心を欠かした結だけ」

頭の血管に冷や水が走る。

説明不足、説明不足、説明不足。

笑いが鼻から漏れた。

「あることがきっかけで結はそうなった」

「なんだよ」

「いうよ」

「…いえ」

らしくもなく、気持ち^せが急いて言葉を欲しがる。

最後は発音を失敗しかけた、たった2文字を口に出すのに。必要以上に息を吐いて誤魔化した。顎がいうことを利かないのだ。

きつとさっきの一撃のせいだ。きつとそうだ。

「結は自殺をしようとして、生死を彷徨い、未遂に終わった」

よくきこえなかった、と僕の耳は聞き間違いを心配してくれる。

口が「は」の音を出す準備をしたまま、動作をしない。

「そうして、記憶を失ったの。元に戻ることは、多くは望まない方がいいと…」

眼球が干からびるのを放置して、正しい現実の世界を血眼^{ちまなこ}になつて探す。

しかし、そこに転がっているのは、嫌いな色で描かれたほんの数文字の羅列。

記憶、心、欠、自殺、生死。

信じられない。信じたくない。

「純くん…」

「続けてください」

目の表皮を湿らせ、酸素を全身に流して、話を呑みこむことに心を賭した。

「その、ソレが未遂に終わり、数か月の入院を経て、彼女は学校生活に戻った。表向きに、生活が可能な彼女は、精神病院にいつまでも居る必要はないし、上手く適用すれば今まで通りの日常に戻る。

それは、再開というよりも、今の結には出発に近いものだけだ。でも、現実には、壁が多くあった。遠巻きにしか説明されていない生徒たちは、無用な憶測を蔓延^{はびこ}らせて、彼女を孤立させ、遠ざけた。それにはさらに他の原因もあるんだけどね」

静先輩は、この世で唯一憎むように、汚らわしいように、唾棄するように、諦めるようにその名前を叫んだ。

さわむらはる
「沢村春」

よく覚えておけ、そう込められていた。

「沢村春、結の…、結をもてあそんだ男」
ハル、その名前に聞き覚えがあった。

忘れもしない、あの日に七恵結が大切に読み上げた名前。

「結は沢村に夢中だった。私と会うことをことごとく無くすほど。でも、結がいいならそれでいいって思ってた。それでもあいつは、結果的に結を巻き込んだ。邪悪で、要らない人間よ。意識があるうちに、沢村に会ったことなんてないんだけどね」

静先輩が、強い言葉を悔しそうに吐き散らす。いってもいっても足りないくらいに。

「意識？」

「沢村は、薬物を乱用して暴れ散らしたあと、さらに大量の摂取を重ね、今はどっかの病院で意識不明のまま」

初耳だ。そんなことがこの学校であったなんて。

「事件直後は、沢村は自殺したと噂されて、当時の結は、それを聞き、…同様に沢村のものと同じ薬物を大量に飲んだ」

全部あいつのせい、そう付け加えた。

「学外では公表されてないけれど、生徒はみんな知っていること。

沢村の事件があった場所で、結は薬を飲んだの。放課後、同じ時間、生徒も見ている目の前で。そんな彼女が戻ってきて、居場所なんかあるわけない。だから、私は…」

「どうして、結先輩はそんなことを？」

ぶしつけ
不躰に質問を投げた。

険悪な表情の彼女は、今度は階段の方に身体を向けた。

「好きだったからよ、他に誰も必要としないくらいに。だから追いかけようと、早まった」

ああ、そうか。

「他に誰も必要としない」、その言葉を向けられたのは僕だけではなかったのか。

僕は先輩の背中を見つめる。

この人も、僕と同じことを――。

「どのくらい経つんですか？結先輩が戻ってきて」

「退院したのが、夏の終わり。でも、最初はしょっちゅう休んできたり、いろいろ問題があって、今彼女は留年生の身。あなたと同じ学年よ」

そこで話は一度終わる。

心を整理するのに時間が足りな過ぎた。

僕は足りない理解を穴埋めするため、質問を導いて、しゃべれるだけの落ち着きを待つ。

「静先輩」

「…なに？」

「あなたは、七恵結のことを、どう思っています？」

「私は、結のことが好き」

すき、の声は優しく広がり、齒切れよく響き渡る。

「私には結が一番なの。大事なときになんにもできない、大きな声が出せない、活発に動けない、そんな弱い弱い私をずっと励まして、支えてくれた。一緒に居てくれた。純くんは知らないかもしれないけど、私はあのこに何度も助けられて、今ここにいるの」

こちらに向き直る、九重静。

「だから、結が病院で一命を取り留めたとき、今度は私の番だなんて、そう思った。独りに戻ったことを、結がそばにいないせいにして甘えていた、そんな自分を変えて、独りになってしまいそうな結を私が助ける。一緒にいてあげる。それは恩返しでもなくて、偽善

でもなくて、自分の気持ちに正直になった結果。私がどんなに罵倒されて、虐げられても、結は私が護るの。記憶を失ったくらいで私は諦めないの」

強い。あまりにも強い決心だった。

戦っている人の顔だ、と思った。

七恵結への想いが、九重静をここまでにしたとは、驚きは絶えない。

でも、どこか崩れ落ちそうで、激しく疲弊している気がした。

”親友”を連呼する彼女を思い出して、強引に声を張り上げる彼女を思い浮かべて、僕は部外者面で何かの限界をそこに見る。

二人の関係は事実、変わっていた。静先輩自身も、そして結先輩自身も。

僕だけが変わっていなかった。

僕は、どうする？

七恵結の過去の本心は、僕を拒絶し、思い出を千切って灰にした。しかしその七恵結はもういない。僕の中には、大切な彼女がいて、彼女の中には、邪魔な僕はいない。僕もまた、彼女に救われた人間だ。”救済”、”拒絶”、事実だけが僕の中に残り、肝心な彼女の中にはない。そして彼女は今、周りの人から拒絶され、その原因は過去の彼女に在って、今の彼女にはない。彼女は今、生まれてきたことを後悔された、そんな心境かもしれない。

そのことを静先輩は、僕に知って欲しいといって、自分のことも含め、打ち明けてくれたのだ。

静先輩がそうした意味が、状況を理解するに従って露骨に感じられ、理解を促した。

「僕に何をしろと？」

目の前の人は悔しそうに、唇を噛む。

「……一緒にいてあげて欲しいの」

再び、僕の前に現れた、選択だ。

「これはね、別に強制じゃないし、いきなりこんなこと話されて意

味わかんないと思うし、私の勝手なお願い。私だけの力ではできないって思ってるんじゃないの。可能なことが、イコール最善ではないから、二人の方が結のためになるのかなって思っただけ」

ほんのり、静先輩の声は柔らかくなっていく。

「新一年生なら、他から噂を聞くことがない限り結を執拗に避けたりしないかなって。私は役員の仕事で毎日はいに行けなくて、学年も違っちゃうからさ…。クラスとか違うと思うけど、ちょっとだけでもいいから、一緒にいてあげて欲しいの…。それに、純くんならって、期待しててさ…」

「どこらへんに？」

表情が緩んで、思い出に視線を泳がせる静先輩。

「あんまりいたくないけどね、二人は、相性いいと思って。ちょっと嫉妬してたんだ。なんていうか、お互いがお互いをほどよく必要として、近づき過ぎない関係。私には真似できない。どうして結があなたまで遠ざけたのか、本当に今でもわからないし。記憶がなくっても、変わらないままの純くんになら、心を開いてくれるかなって…」

「私には無理でも」と切なげに聞こえた気がした。

静先輩はやさしい温もりで、僕の心のヒビに酸を流し込む。

やけどで爛れた肌^{ただ}に針を刺す痛みが、僕を襲った。

瞬間、「僕は」という声を、「純くんは」という早口が圧す。

「純くんは、結のことを、どう思ってるの？」

「七恵結のことは」

わからない。

ずっと保留にして来たんだ、存在を”拒絶”されたあの日から。

その理由もわからず、再会した今でも、彼女への想いは定まらない。だから先送りに先送りにして、僕自身では解決不可能な感情の整理から逃げてきた。考えないことを解決策として見出した。今までと同じように、僕は思い出を押し殺して”拒絶”を繰り返す。

しかし、どうだ？

状況が変わり、衝撃的な事実を突きつけられて、似た境遇にある人間の決心を見せられた。

自分を護るための僕の決心は揺さぶられる。

七恵結の記憶がないことはつまり、彼女に対するたったひとつの希望だった”確かめたいこと”を知るすべがないことを意味する。

真実を知って、先送りにした納得を得ることは、もう、叶わないんじゃないのか？

それならば、消去法が僕に道を示す。

「忘れない」

忘れたいんだ本当は。

「あの人に突き放されたことなんか、忘れない。無かったことにしたいんだ。出会ったことから全て」

静先輩は何も言わない。

「僕は、あなたみたいに強くないです。すいません。今の僕の望みは、七恵結を僕の頭から消すことです」

ふう

また一息が響いた。

静先輩は表情を固くして、「わかった」と言った。

「じゃあ、この話は終わりっ!!」

ぱちんっ

合掌して、会話の終わりを告げる。

「ごめんね、突き合わせちゃって。なんか重くしちゃったし」

軽く手を振られた。

よくできた、満面の笑みと、光を集めた金髪が目には焼きつく。

軽く伸びをしたり、わざとらしい欠伸をしたりして適当に時間を空けた。

僕は見ないふりをして、動悸を抑えるのに尽力する。

「でわでわ!お近づきの印に一発どうでしょう?」

そう言いながら、僕の腰より下を手で触り始める。

「おい、なんの冗談——」

さすがにここで悪ふざけをされると、堪忍袋が空中分解しそうになって思わず静先輩の手首を握る。

その手の上では、僕の携帯電話が「どうした？」と言わんばかりに時刻を表示していた。

—PM06:18—

舌打ちを3回。

「メルアドとかさ、交換しよーよー。あれ？なに赤くなってんの？ムフフ」

怒るのも馬鹿らしくなって、空気をぶち壊す遊戯に形だけ参加することにした。

静先輩なりの、空気の読み方かもしれないけど。助け船を出されたのは僕の方かもしれない。

虚ろな目で、アドレス交換を果たし、意識の薄いまま二人で階段を下る。

一方通行の学生トークを強いられながら、露骨に元気づけられているようで正直、鬱陶しかった。

心此处に在らずの模範生を担当して、伝えられた真実に実感が持てないまま、学校地下の駅まで来る。

始終無言を貫いている僕に、やたらと密着しながら歩く静先輩を横目に、混雑する周りの学生に目を配った。

一日の内に、多くのことが起こり過ぎた。何も考えられないまま、肩を落として幾度となく溜息をつく。

地下鉄の時刻を表示する黄色やオレンジの電光掲示板の表示にも眩暈めまいを起こしそうだった。

改札で、静先輩は用事があるからと、僕に告げ、向き合う。
「時間はあるからさ」

優しい方の声だ。

「もしも気が変わったら…」

不機嫌さと疲労が余って、僕は耐えられずに顔を背けた。

「ごめん……」

じゃあね！

無駄に大きな声を響かせて走って行った。家は近所なので電車を降りるまで一緒、はさすがにお互い苦しかったかもしれない。

暗黙下でギリギリの精神状態だったのも、お互いさまだった気がした。

その日は家に帰り、沢村の事件のことをネットで調べ、重い頭と体を引きずって床についた。

(後書き)

ありがとうございました!!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0405v/>

ハナノナノ（未定） 3

2011年7月30日03時23分発行